

雪間の草のかくれ水

土田龍太郎

一、

あらたまの年立ちかへりて春來にけりと知らするもの、外山の霞と梅の香りまた鶯の聲に野への若菜よりはじめてくさぐさあり。かかる春のきざしを歌に詠める例いとあまたにてつぶさに數へあぐともなにかはせむなれば（「せむなれば」にちよつと無理があるように思います。「なにかはせむ。されば、……………」はどうでしょうか）、今はかつが左は五首ばかり引かばことたらひぬべし。

山部赤人

昨日こそ年は暮れしか春霞

春日の山にはや立ちにける

大江千里

鶯の谷より出づるこゑなくば

春來ることをたれかしらまし

紀貫之

野邊見れば若菜摘みけりむべしこそ

垣根の草も春のきにければ

攝政太政大臣良經

みよし野は山もかすみて白雪の

ふりにし里に春は來にけり

よみ人しらず

時はいま春になりぬとみ雪ふる

遠き山べにかすみたなびく

いづれ春にあひて喜べる心をさしも巧までおほどかに詠みおほせたり

二、

春はや來にけりと人は云ふめれど、雲なほ消えやらで降りやまぬところさへあり。定かなる春のけしきいまだいづこにも見えねばあいなきことこよなし。かかる心ぼそきさかひを詠める歌とて左にはしばらく兩首ばかり引きみるべし。

よみびと知らず

春がすみたてるやいづこみよしのの

よしのの山に雪はふりつつ

平祐舉 すけたか

春立ちて朝の原の雪見れば

まだふる年の心ちこそすれ

三、

右の兩首とはうらうへに、しるけき春のきざしこそいまだいづくにもあらはれね、春たつと人の云へるをただ聞くからに、思ひなしばらくりにてもあらめども、いかさま山もはや霞そめたりやにおぼゆることなきにあらず。かかるおもむきを詠める歌とてかならずあげであるまじきは、壬生忠岑が平定文の家歌合にてものせるなる

春立つといふ許ばかりにやみ吉野の

山もかすみて今朝は見ゆらん

といへる一首にほかなきなり。春の訪れをたのみつつ心はやりてそぞろに待ちかぬるおぼつかなき思ひをよどみなく詠み下せるこの一首げにいみじきことただならず。

この歌拾遺和歌集に巻頭に載りたればつとに名に立てれど、四條大納言公任卿また和歌九品くほんにて、人麿の詠めりしかの世に聞えたるほのと明石の浦の云々てふ一首ともども上品の上に位せしめつつ、これはことばたへにしてあまりの心さへあるなりてふ評語さへ加へたるは餘情よせいのかたにすぐれたるをめでられたるゆゑにてもあるらむ、やや世下りて京極黃門定家卿その詠歌大概と近代秀歌にてよき歌あまた列ねたれど、いづれにてもこの忠岑の歌をはじめにすゑたるは、これをわけて重くせられしにまぎれなきなり。

四、

年ごとの春の行き還りのみにてもあらず、およそ四時交替といふこと乾坤の營み造化のわざにほかなきなり。この營みかならず目には見えずつねはかくれたるものから、まことはたえずはたらきてしばしだに止むことなし。

春立ちていく日かなるらむ、四方のけしきをながめやるに、いまだ春めける氣配とてはさらになし。わづかに野中の草のかげを流るる雪消ゆきげのかくれ水、そのかそけ音ねにふとおどろかるるぞめでたくおもしろきこといはむかたなし。この意こゝろ

春立つと野への草間のかくれ水

かそけ音にぞおどろかれぬる

ともまた

山里はまだ消えやらぬ雪間もる

水の音にや春を知るらむ

とも詠むべけむかし。いづれ乾坤のひそやかなる營みのたへにくすしきわざをゆくりなく
しらしむること、春立つころの雪間の草のかくれ水にしくものをさをさ思ひがたかるべし。

（令和八年三月二十六日受附）